

学習者の希望と教師の理想 — 外国語の授業における一致・不一致を考える —

稲葉 みどり

日本語教育講座

Revealing the Discrepancies in Learners' and Teachers' Beliefs about Foreign Language Learning

Midori INABA

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

本稿では学習者と教師の外国語学習の意識（文化知識の必要性、文法、語彙の学習意識、翻訳による学習法、発表形態の教室活動、誤りの訂正の是非）を調査し、両者を比較した。中学1～3年生、及び、小中学校教師にアンケートを実施し、1) 中学1～3年生の意識、2) 小中学校教師の意識、3) 中学生と教師の意識の相違を分析した。その結果、中学生の回答からは以下の点が明らかになった。文化知識は学年が上がると必要だと考える割合が増加する。文法学習は全体に重要だと考える割合が高く、授業で詳しい文法説明を希望している。語彙学習は学年が上がると重要だと考える割合が増加し、教師による説明や翻訳を希望している。翻訳は非常に好まれる学習方法である。発表形態の教室活動は1年生には支持されないが、2年生には支持され、3年生になると両極に分かれる。誤りはその場で直してもらいたいと考えている。これらの結果は、教師が理想とする学び方や教え方とは必ずしも一致しないことが明らかになった。

Keywords: ビリーフ、英語教育、外国語学習、意思決定、実践的思

1. はじめに

本稿では、外国語学習に関わる学習者の意識と外国語教育に関わる教師の意識を比較する。学習者が外国語(英語)の学習についてどのような考え信条をもっているか、どのような教え方で学びたいか等をアンケート調査する。また、教える側にも類似の調査を行い、学習する側と教える側の意識を比較し、類似点と相違点を明らかにする。外国語教育においては、学習者がどのような学習意識、学習スタイル、学習ストラテジー等をもっているかを知った上で、教師は教授法、教室活動を考えることが大切である。ここでは、そのための基礎的な情報を得ることを目的とする。

2. 先行研究から見たビリーフ研究の意義

2.1 教育実践における教師の意思決定

外国語教育の実践において教師は様々な活動を行

う。教材の選択、学習活動の提供、質疑応答、ドリル練習、誤用の訂正、フィードバック、復習等、教師の行う活動はすべて教師の意志決定に基づいている。Richards and Lockhart (1994) は、教えるとき教師は絶えず様々な選択肢に直面し、特定の目標に合ったものを選択しなければならないことを指摘している。そして、教師の意思決定として、授業が始まる前の段階での意思決定である計画意思決定(planning decision)、授業中の様々な局面における意思決定である相互作用的意思決定(interactive decision)、授業後に効果や今後の方向を決定する評価的意思決定(evaluative decision)の3種類を提示している。教育実践においてこれらの意思決定がどのように行われるかを探ることは、教授活動を内省、改善、発展させていく上で有用である。

2.2 教師の実践的思考のプロセス

教師の意思決定の背景には教え方、指導の内容や過

程に関して教師が抱いている目標、価値、信念等がある。例えば、言語プログラムやカリキュラムについてのどのような考え方を持っているかは授業計画、目標設定、評価や効果の測定等に大きな影響を与える。また、効果的な指導法や教室における教師の役割の捉え方が異なれば、授業の方法も変わってくる。学習について教師がもっている信条（学習観）は、導入、練習等の教室活動を行う上で判断、決定の根拠となっていると考えられる。これらの言語学習の方法・効果等について人々が自覚的あるいは無自覚的にもっている信念や確信をここではビリーフと呼ぶことにする。

Richards and Lockhart (1994) は、これらの意思決定の根底にはビリーフや思考プロセスがあることを指摘している。そして、教師のビリーフ形成の根源は、言語学習者としての経験（根拠、すべての教師はかつて生徒だった）、成功した体験、確立した習慣（例、ある学校、教育機関、学区域では特定の指導スタイルや習慣が好まれている）、個人的な要因（例、指導パターン、手順、活動の好み）が教師の個性に合っている）、教育や研究に基づいた原理（例、教師は学習理論の理解を心理学、第二言語習得論、教育学等に求めそれを応用する）、指導法やアプローチから得られた原理（例、特定の指導法やアプローチの有効性を信じてそれを教室で実行しようとする）等を挙げている。よって、教師の実践的思考にビリーフは深く関わっている。

2.3 教師のビリーフと教授行動

ビリーフは教師の実践的思考の背景を成し、授業においてとるべき教授行動の決定の根拠となっている。よって、教師は自分のビリーフや他の教師のビリーフを確認・認識しておくことが重要である。自分の教授方法がどのような考え方に基いて構成され、実践されているかを明確にすれば、それが妥当かどうかを内省することができる。また、他の教師と自分のビリーフと比較することにより、別の視点から教授活動を考えるのにも役立つ。

教師は学習者のビリーフを把握しておくことも重要である。教師と学習者のビリーフの不一致があると教室活動を円滑に進める妨げとなる。Riley (1997) は、ビリーフは学習者の態度や動機付けと同じようにストラテジーの決定に直接関わりと主張している。特に、動機、態度、学習過程に影響を与えることを強調し、もし学習者のビリーフと指導の構成に埋め込まれているビリーフの間に不適合があると、何らかの摩擦や不満が必ず生じることを指摘している。よって、教師と学習者の双方のビリーフを調査することは重要である。

3. 研究の方法

3.1 研究課題

本稿では言語学習に関する意識を中学1～3年生、及び、小中学校教師にアンケート調査し、中学生が希望する学び方や教え方と教師が理想とする学び方や教え方が一致しているかどうかを以下の手順で考察する。

- (1) 中学1～3年生の学年別の意識とその推移
- (2) 小中学校教師の意識
- (3) 中学生と教師の意識の類似点と相違点

3.2 被験者

被験者は愛知県小牧市の一つの公立中学校の生徒と同じ小牧市内の小中学校の教員である。生徒と教師の意識を比較するため、生徒となるべく近い学習環境にある教師（同じ市長村）で調査を実施した。中学生の内訳は、1年生30人、2年生30人、3年生33人、総計93人である。教員の内訳は、小学校教員22人、中学校教員28人、総計50人である。小学校教員、中学校教員の分類はその時点での所属とした。

3.3 アンケート調査の内容

中学生に対するアンケート調査は、外国語（英語）の学習に関する36項目の質問で構成されている。この中の22項目は、学習の仕方や教え方に関する質問、8項目は外国語（英語）学習のビリーフに関する質問、残りの6項目は、外国語学習に伴う様々な感情や気持ちに関する質問である。

学習の仕方や教え方に関する質問は、久保田(2006, p. 38) の教授法に関する質問を学習者の好み、または希望する学習法を答える内容の質問に作り変えて¹作成した。ビリーフに関する8項目の質問は、BALLI (Horwitz, 1985, 1987)²の中から被験者に関わりのあるものを選んで中学生にわかりやすい言葉で提示した。被験者の負担を考慮して、質問数は8項目に抑えた。最後の6項目は記述式で、Lightbown and Spada (1993) の言語学習に関するよくある考え方 (popular ideas about language learning) の12の質問を参考に作成した。

教師に対するアンケート調査は、教授観、学習観等に関する125の調査項目で構成されている。これには、中学生を対象とする36項目も含まれている。本稿では、この中の共通の10項目について両者の結果を対照して考察することにする。

回答の方法は中学生の調査では4段階（「1. まったくそう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. 少しそう思う」「4. 強くそう思う」／「1. 全くそうしてほしくない」「2. そうしてほしくない」「3. そうしてほしい」「4. とてもそうしてほしい」）³のリッカートスケールを用いた。BALLIは5段階のスケールである

が、ここでは中学生にどちらかに決定してもらうために「どちらともいえない」の旨の選択肢は省いた。教師を対象とした調査は5段階のスケール（「1. 強く反対する」「2. 反対する」「3. 同意も反対もしない」「4. 同意する」「5. 強く同意する」）で回答する形式を用いた。取り上げた内容は以下の10項目である。

- (1) 外国語を話すにはその国の文化を知る必要がある
- (2) 外国語学習で一番重要な部分は文法の学習である
- (3) くわしい文法説明を受ける
- (4) 外国語学習で一番重要な部分は語彙（単語・語句）を身につけることである
- (5) 語彙（単語・語句）を覚える／暗記する
- (6) 教師が語彙（単語・語句）を母語で説明する
- (7) 教師が外国語を日本語（母語）に訳す
- (8) 学習者が外国語を日本語（母語）に訳す
- (9) 学習者が発表する
- (10) 外国語の誤りはその場ですぐに直してもらう

4. 結果と考察

4.1 外国語学習と文化知識の必要性

外国語の学習に文化的な知識が必要だと考えているかどうかに関して考察する。(1)「外国語を話すにはその国の文化を知る必要がある」という考えに対して、中学生には「1. まったくそう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. 少しそう思う」「4. 強くそう思う」の4段階で回答してもらった。表1はその結果である。

1年生は、「3. 少しそう思う」「4. 強くそう思う」の合計と「1. まったくそう思わない」「2. あまりそう思わない」の割合の合計が50%ずつである。よって文化知識の必要生については考えがはっきりしていないのではないかと考えられる。

2年生は「2. あまりそう思わない」人が63%で過半数を占める。この時期、学習の関心が発音、文法、語彙等に置かれているのではないかと考えられる。

3年生は「4. 強くそう思う」「3. 少しそう思う」の回答の割合が80%以上で、文化知識が重要と思う割合が非常に高い。学習が進むにつれて、コミュニケーションや言語使用の面から、文化知識の必要性を認識するのではないかと考えられる。

この調査から、文化知識の必要性に関しては、学年で大きく変化し、学年が上がるとともに文化知識が重要だという意識が上がるということがわかる。

表1：文化知識の必要性に関する中学生の意識（%）

SQ-25	1	2	3	4
1年生	23	27	33	17
2年生	13	63	17	7
3年生	9	9	58	24
平均	15	33	36	16

表2は同じ質問に対する小中学校教師からの回答である。教師には、「1. 強く反対する」「2. 反対する」「3. 同意も反対もしない」「4. 同意する」「5. 強く同意する」の5段階で回答してもらった。

小学校教師も中学校教師も「4. 同意する」「5. 強く同意する」を合わせると、82%、86%と高い割合を示す。よって、教師は外国語の学習に文化知識が必要だと強く考える傾向が見られる。

表2：文化知識の必要性に関する教師の意識（%）

TK1-5	1	2	3	4	5
小学校教師	5	0	14	68	14
中学校教師	0	0	14	62	24
平均	2	0	14	65	19

4.2 文法の学習意識

外国語の学習において文法の学習をどのように考えているのかについて考察する。(2)「外国語学習で一番重要な部分は文法の学習である」という質問に対して、中学生にそう思うかどうかを4段階で回答してもらった。表3はその結果を示している。

1年生は、「3. 少しそう思う」が43%、「4. 強くそう思う」が10%、合計53%が文法学習は重要と考えている。一方、「1. まったくそう思わない」が37%、「2. あまりそう思わない」が10%、合計47%で、それほど重要と考えていない人もいる。全体としては、そう思う人と思わない人が半々に分かれるが、この段階では、「1. まったくそう思わない」人が多いことが特徴だと言える。

2年生は「3. 少しそう思う」が43%、「4. 強くそう思う」が17%、合計60%が重要と考えている。一方、「2. あまりそう思わない」が37%、「1. まったくそう思わない」が3%、合計40%が重要とは考えていない。

3年生は「3. 少しそう思う」が45%、「4. 強くそう思う」が42%、合計87%が重要と考えている。よって、学年が上がると文法学習が重要と思う人の割合が非常に高くなることがわかる。

表3：文法学習の重要性に関する中学生の意識 (%)

SQ-29	1	2	3	4
1年生	37	10	43	10
2年生	3	37	43	17
3年生	0	12	45	42
平均	13	20	44	23

同じ質問に対する教師の回答を表4に示した。教師には先と同様の5段階で回答してもらった。小学校教師の場合、「2. 反対する」が50%、「1. 強く反対する」が23%、合計73%で高い割合を占める。中学校教師の場合、「2. 反対する」が67%、「1. 強く反対する」が5%、合計72%で小学校教師と同様に高い割合を占める。よって、教師は「外国語学習の中で一番重要なのは文法の学習である」とは考えていない傾向にあることがわかる。これは、中学3年生とはかなり異なる結果である。

表4：文法学習の重要性に関する教師の意識 (%)

TK1-8	1	2	3	4	5
小学校教師	23	50	23	5	0
中学校教師	5	67	24	5	0
平均	14	58	23	5	0

さらに、中学生に対して、どのような外国語(英語)の学習方法や教え方で学びたいかを調査した。(3)「詳しい文法説明を受ける」ことに対する考えを、「1. 全くそうしてほしくない」「2. そうしてほしくない」「3. そうしてほしい」「4. とてもそうしてほしい」の4段階で回答してもらった。表5はその結果を示している。

1年生は「3. そうしてほしい」「4. とてもそうしてほしい」の回答を合わせると63%が文法説明を希望している。一方、残りの37%はあまり希望していない。2年生は「3. そうしてほしい」が41%、「4. とてもそうしてほしい」が45%、合計96%が説明を希望している。3年生は「4. とてもそうしてほしい」だけで85%を占め、詳しい文法説明を希望する割合が非常に高い。よって、中学生は学年が上がると文法説明を希望する割合が高くなることがわかる。

表5：文法説明を受けることへの中学生の意識 (%)

SQ-4	1	2	3	4
1年生	10	27	30	33
2年生	0	14	41	45
3年生	0	3	12	85
平均	3	14	28	54

教師には、「教師は授業で詳しい文法説明をする必

要がある」についてどう考えるかを、先と同様の5段階で回答してもらった。

表6はその結果を示している。小学校教師の45%が「2. 反対する」と回答した。「1. 強く反対する」の5%と合計すると、50%が「授業で詳しい文法説明をする必要がある」とは考えていない。「4. 同意する」が9%で「5. 強く同意する」は0%で、概して文法説明は必要ないと考えていることがわかる。

中学校教師は、「1. 強く反対する」が10%と小学校教師より多い。「2. 反対する」は19%で、合計29%が反対と考えている。「4. 同意する」は14%で、小学校教師よりも幾分多いものの、「5. 強く同意する」はこちらも0%であった。よって、中学校教師も授業で詳しい文法説明が必要とは考えていない傾向が見られる。

以上から、中学生は学年が上がると文法の学習が重要だと思われるようになる。また、授業でも文法の詳しい説明を受けたいと思っている。しかし、概して教師は文法の説明をそれほど重要だとは考えていないこと、また、授業で詳しい説明をする必要があると考えていない傾向があると言える。

表6：文法説明の必要性に関する教師の意識 (%)

TK1-4	1	2	3	4	5
小学校教師	5	45	41	9	0
中学校教師	10	19	57	14	0
教師全体	7	32	49	12	0

4.3 語彙の学習意識

語彙の学習についてどのように考えているかを考察する。(4)「外国語学習の一番重要な部分は語彙(単語・語句)を身につけることである」という考えに対して、中学生にそう思うかどうかを4段階で回答してもらった。表7はその結果である。

1年生は、「3. 少しそう思う」が40%、「4. 強くそう思う」が13%で、合わせると53%の人が肯定的な回答をしている。「2. あまりそう思わない」が37%、「1. まったくそう思わない」が10%で、合計47%が否定的な回答をしている。2年生は、否定的な回答が57%で、肯定的な回答43%をやや上回るが、分布傾向は類似している。3年生は、「3. 少しそう思う」が70%、「4. 強くそう思う」が21%、合計91%の人が肯定的な回答をしている。

以上から1、2年生では、語彙学習が重要だと思うかどうかは両極に分かれるが、3年生になると語彙学習が重要だと思う傾向が顕著になる。

表7：語彙学習の重要性に関する中学生の意識 (%)

SQ-27	1	2	3	4
1年生	10	37	40	13
2年生	17	40	30	13
3年生	3	6	70	21
平均	10	28	47	16

一方、同じ質問に対する教師の回答を表8に示した。教師には先と同様の5段階で回答してもらった。小学校教員の場合、「4. 同意する」が27%、「5. 強く同意する」が5%、合計32%が肯定的な考えを示している。「2. 反対する」が23%、「1. 強く反対する」が5%、合計28%が否定的な考えを示している。中学校教師の場合も類似の分布である。よって、語彙学習の重要性に関しては、教師間で考えが分かれる傾向が見られる。

表8：語彙学習の重要性に関する教師の意識 (%)

TB-17	1	2	3	4	5
小学校教師	5	23	41	27	5
中学校教師	10	20	35	30	5
平均	7	21	38	29	5

さらに、中学生に対して、(5)「語彙(単語・語句)を覚える／暗記する」という学習方法や教え方で学びかについて、そうしてほしいかどうかを4段階で回答してもらった。表9はその結果を示している。

1年生は「3. そうしてほしい」「4. とてもそうしてほしい」の回答を合計すると64%、2年生は90%、3年生は94%になり、語彙を増やす学習に肯定的な傾向が強く見られる。この傾向は学年が上がると顕著になる。よって、中学生は語彙(単語・語句)を覚える／暗記するという学習方法を希望していることがわかる。

表9：語彙を増やす学習に関する中学生の意識 (%)

SQ-17	1	2	3	4
1年生	3	33	27	37
2年生	0	10	47	43
3年生	0	6	58	36
平均	1	16	44	39

また、(6)「教師が語彙(単語・語句)の意味を母語で説明する」という教え方で学びたいかについて中学生に4段階で回答してもらった。表10はその結果を示している。1年生では、「3. そうしてほしい」「4. とてもそうしてほしい」を合計すると87%、2年生では93%、3年生では100%を占め、全学年で教師による語彙の説明による学習を希望していることがわかる。

表10：母語による語彙説明に関する中学生の意識 (%)

SQ-8	1	2	3	4
1年生	0	13	40	47
2年生	0	7	43	50
3年生	0	0	53	47
平均	0	7	45	48

教師には、どのような教え方がよいと思うかを尋ねた。(6)「教師が語彙(語句の意味)を母語で説明する」という教え方をどう思うかに関して、先と同様の5段階で回答してもらった。表11はその結果を示している。小学校教師では、「4. 同意する」が30%で、「2. 反対する」が15%である。中学校教師は、「4. 同意する」が25%で、「2. 反対する」が30%という回答を得た。両グループとも、「5. 強く同意する」「1. 強く反対する」は0%で、「3. 同意も反対もしない」が約半分の割合を占める。中学生の強い希望とは、少し異なる結果である。

表11：母語による語彙説明に関する教師の意識 (%)

TK2-9	1	2	3	4	5
小学校教師	0	15	55	30	0
中学校教師	0	30	45	25	0
平均	0	23	50	28	0

逆に「例文から語彙(語句の意味)を推測させる」(教師のみの質問項目)という教え方について先と同様の5段階で回答してもらった。表12はその結果を示している。小学校教師の70%が「4. 同意する」と回答している。中学校教師は70%が「4. 同意する」、「5. 強く同意する」が20%で、合計90%が肯定的な考えを示し、教師により強く支持されていると言える。

表12：意味を推測させることへの教師の意識 (%)

TK2-10	1	2	3	4	5
小学校教師	0	0	30	70	0
中学校教師	0	0	10	70	20
平均	0	0	20	70	10

4.4 翻訳による学習法

翻訳による学習についてどのように考えているかを考察する。(7)「教師が外国語を日本語(母語)に訳す」という教え方について中学生にそうしてほしいかどうかを4段階で回答してもらった。表13はその結果を示している。

1年生は、「4. とてもそうしてほしい」が63%、「3.

そうしてほしい」が10%で、合計73%がこの方法を希望している。2年生は合計73%、3年生は合計81%で、類似の傾向が見られる。翻訳は中学生にとって好みの学習法であることがわかる。

表13：教師の翻訳による学習への中学生の意識 (%)

SQ-6	1	2	3	4
1年生	7	20	10	63
2年生	0	27	40	33
3年生	3	15	42	39
平均	3	21	31	45

一方、同じ質問に対する教師の回答を表14に示した。先と同様の5段階で回答してもらった。表14はその結果を示している。小学校教員の場合、「3. 同意も反対もしない」が65%で、一番高い割合を占めている。「2. 反対する」が25%、「4. 同意する」が10%で、「5. 強く同意する」は0%である。この結果をみると、教師の翻訳はそれほど強く支持されていない。

中学校教師の場合も「3. 同意も反対もしない」が55%で過半数を占めている。「2. 反対する」が15%、「4. 同意する」が30%で、「5. 強く同意する」は0%である。小学校教師よりは同意する割合が多いと言える。しかし、この結果をみると、教師が翻訳する教え方はそれほど強くは支持されていないことがわかる。

表14：教師の翻訳による学習への教師の意識 (%)

TK2-7	1	2	3	4	5
小学校教師	0	25	65	10	0
中学校教師	0	15	55	30	0
平均	0	20	60	20	0

さらに(8)「学習者が外国語を日本語(母語)に訳す」に対して中学生にそうしてほしいかどうかを4段階で回答してもらった。表15はその結果を示している。

1年生は、「4. とてもそうしてほしい」が40%、「3. そうしてほしい」が27%で、合計67%がこの方法に肯定的である。しかし、「2. そうしてほしくない」が20%、「1. 全くそうしてほしくない」が13%で、否定的な回答も見られる。

2年生は、「3. そうしてほしい」が48%、「4. とてもそうしてほしい」が21%で、合計69%がこの方法に肯定的である。しかし、「2. そうしてほしくない」が27%、「1. 全くそうしてほしくない」が10%で、否定的な回答も31%見られる。

3年生は、「3. そうしてほしい」が45%、「4. とてもそうしてほしい」が45%で、合計90%がこの方法に肯定的である。

よって、1~2年生では、学習者が訳すという方法に否定的な人もいるが、3年生になると大半がこの方法に肯定的なことがわかる。中学生は概して、外国語を日本語に訳するという学習方法を好むと言える。

表15：学習者の翻訳による学習への中学生の意識 (%)

SQ-7	1	2	3	4
1年生	13	20	27	40
2年生	10	21	48	21
3年生	0	9	45	45
平均	8	17	40	35

同じ質問を教師に先と同様の5段階で回答してもらった。表16はその結果を示している。

小学校教員の場合、「2. 反対する」が40%、「5. 強く反対する」が10%、合計50%が否定的である。「4. 同意する」は15%、「5. 強く同意する」は0%である。

中学校教師の場合も、「2. 反対する」が45%、「5. 強く反対する」が5%で、合計50%が否定的である。しかし、「4. 同意する」が25%で、肯定的な人も見られる。「5. 強く同意する」は0%である。

以上から、翻訳するという学習法は中学生には支持されているが、教師にはあまり支持されない傾向にあると言える。

表16：学習者に母語に翻訳させることへの教師の意識 (%)

TK2-8	1	2	3	4	5
小学校教師	10	40	35	15	0
中学校教師	5	45	25	25	0
教師全体	8	43	30	20	0

4.5 発表形態の教室活動

発表形態の教室活動を通じた学習方法について考察する。(9)「学習者が発表する」という教え方や教室活動について、そうしてほしいかどうかを中学生に4段階で回答してもらった。表17はその結果を示している。

1年生は、「1. 全くそうしてほしくない」が37%、「2. そうしてほしくない」が17%、合計54%があまりこの方法を望んでいない。しかし、「3. そうしてほしい」が37%、「4. とてもそうしてほしい」が10%、合計47%がこの活動を希望している。よって、1年生の場合は半々に分かれる。

2年生は、「3. そうしてほしい」が53%、「4. とてもそうしてほしい」が33%、合計86%がこの方法を希望している。一方、「2. そうしてほしくない」が10%、「1. 全くそうしてほしくない」が3%、合計13%でこ

の活動を望まない人は少ない。よって、2年生になると発表形態の教室活動を好む人が多くなる。

3年生は、「3. そうしてほしい」が48%、「4. とてもそうしてほしい」が21%、合計69%がこの方法を希望している。しかし、「2. そうしてほしくない」が27%、「1. 全くそうしてほしくない」が14%、合計41%があまりこの活動を望んでいない。3年生になると、この活動を好む人と好まない人の両極に分かれることが示唆される。

表17：学習者が発表することへの中学生の意識 (%)

SQ-14	1	2	3	4
1年生	37	17	37	10
2年生	3	10	53	33
3年生	3	27	48	21
平均	14	18	46	22

同じ質問に対して、教師にも先と同様の5段階で回答してもらった。表18はその結果を示している。

小学校教員の場合、「4. 同意する」が80%で、「2. 反対する」は10%である。

中学校教師の場合、「4. 同意する」が60%で、「5. 強く同意する」が30%、合計90%がこの方法をよいと考えている。よって、発表形態の教室活動は教師には圧倒的に支持されている。

表18：学習者が発表をすることへの教師の意識 (%)

TK2-21	1	2	3	4	5
小学校教師	0	10	10	80	0
中学校教師	0	10	0	60	30
平均	0	10	5	70	15

4.6 「誤りの訂正」の是非

授業中の誤りの訂正についての意識を考察する。(10)「外国語の誤りはその場ですぐに直してもらおう」ことについて、中学生にそうしてほしいかどうかを4段階で回答してもらった。表19はその結果を示している。

1年生は、「4. とてもそうしてほしい」が57%、「3. そうしてほしい」が37%で、合計94%の人が直してほしいと考えている。

2年生は、「3. そうしてほしい」が40%「4. とてもそうしてほしい」が37%、合計77%の人が直してほしいと考えている。一方、「2. そうしてほしくない」が17%、「1. 全くそうしてほしくない」が6%で、合計23%は直してほしくないと思う人もいる。

3年生では、「3. そうしてほしい」が42%「4. とても

もそうしてほしい」が42%、合計88%の人が直してほしいと考えている。一方、「2. そうしてほしくない」が16%いる。この結果から、概して中学生は誤りをすぐに直してほしいと思っていることがわかる。

表19：誤りの即座の訂正に関する中学生の意識 (%)

SQ-21	1	2	3	4
1年生	0	6	37	57
2年生	6	17	40	37
3年生	0	16	42	42
平均	2	13	40	45

誤りの訂正に関して、教師はどのように考えているかを調べるために「誤りはすぐに直さなければならぬ」という考えに対して、先と同様の5段階で回答してもらった。表20はその結果を示している。

小学校教師の場合、「3. 同意も反対もしない」が45%で一番多い。「2. 反対する」が25%、「1. 強く反対する」が5%、合計30%が否定的な見解を示している。中学校教師の場合も類似の結果である。

以上から教師は誤りの訂正については非常に慎重であることがわかる。これは、誤りをその場で直してほしいと思っている中学生の傾向とは異なる。

表20：誤りの即座の訂正に関する教師の意識 (%)

TK2-17	1	2	3	4	5
小学校教師	5	25	45	25	0
中学校教師	0	35	40	25	0
平均	3	30	43	25	0

5. ディスカッション

学習者と教師の外国語学習に関する意識調査から以下の点が明らかになった。

外国語学習における文化的知識に関しては、学習初期の中学1～2年生はそれほど重要と感じていないが、3年生になると重要性だと考える割合が増える。教師の大半は文化知識が重要と考えている。これは外国語の学習が進むと、文化的知識の重要性をより強く認識することを示しているのではないだろうか。

文法の学習に関しては、中学生は重要だと考える割合が高く、授業でも詳しい文法的説明を希望している。一方教師は、文法の学習が重要と考える割合は中学生よりも低く、授業で詳しい文法的説明をする必要はあまりないとする傾向が見られる。

語彙の学習に関して、中学生は学年が上がるごとに重要と考える割合が増加し、教師による説明や翻訳を希望している。これに対して教師は翻訳ではなく、

例文等から意味を推測する学習が有益であるとする傾向にある。

翻訳による外国語学習は、中学生には非常に好まれる学習方法である。しかし、教師にはあまり支持されていない。

学習者による発表形態の教室活動は、学習初期の1年生にはあまり支持さないが、2年生には強く支持される。しかし、学習が進んだ3年生になると好む人とそうでない人に分かれる。一方、教師には圧倒的に支持されている。

誤りの訂正に関して、中学生は外国語の誤りはその場ですぐに直してもらいたいと考えているが、教師はすぐに直すことを支持する割合は低く、その場で直すことに非常に慎重な姿勢を示す。誤用の訂正により学習意欲を低下させないような配慮が必要だと考えているからではないかと思われるが、この点を実証するにはさらに調査が必要である。

6. 教育への示唆

学習者の思いが教師の思いと一致していることは授業を行う際に大切であると思ったのがこの調査のきっかけである。そして、本調査から外国語学習における学習者と教師の意識の相違点の一端が明らかになった。教師は授業実践において意思決定の基盤の一つとなる自分のピリーフを確認するとともに、学習者のピリーフを把握した上で授業づくりをすることが大切である。そして、授業では、学習者に教師の考え方を明確に伝え、教授法や教室活動の目的や意図を理解してもらうことが学習の促進につながると考える。また、必要に応じて学習者の考え方に歩み寄り、学習者の期待に応えるような工夫も取り入れれば、教師と学習者の間に誤解や不信感を招くことは避けられるだろう。今後は、これまでの稲葉 (2010, 2011, 2012)、山本・河合 (2011) の学習者に関する様々な研究と合わせて、さらに深い調査をしていきたいと考えている。

謝 辞

中学生に対する調査内容の精査には山本敦子氏から有益なご意見をいただきました。また、アンケート調査にあたっては、多くの方々のご協力を得ました。小牧市英語教育研究会顧問の本庄肇氏、研究主任の山本敦子氏、会員の方々、愛知教育大学大学院生の近藤恵奈氏、及び、調査に答えてくださった中学生、及び、教員の方々にこの場をかりて御礼申し上げます。

注

¹ 中学生に該当しない項目は省いた。

² Horwitz (1985, 1987)は、学習とコミュニケーションストラテジーを鍵となるピリーフとして含めて、BALLIと呼ばれる言語学習に関する調査方法 (Beliefs About Language Learning Inventory) を開発した。

³ 選択肢の表現が教員と中学生では少し異なる。これば、中学校教員の方から生徒に柔らかい言葉を用いて回答を求める方がいいというアドバイスをいただいたからである。また、中学生対象の調査は質問内容によって選択肢の言葉を変えた。

参考文献

- 稲葉みどり (2010). 「学習者の視点を取り入れた授業創りの工夫—中学生の英会話の学習意識調査を基に」. *Claritas* 22, (愛知教育大学英語英文学会) pp. 48-73.
- 稲葉みどり (2011). 「外国語教育における教師と学習者のピリーフを考える」. 『小中英語教育教員研修会—授業指導力・英語コミュニケーション能力の向上をめざして』 研修会資料集 pp. 15-18.
- 稲葉みどり (2012). 「外国語の学習観・教授観・ピリーフと教師の役割を考える」『新学習指導要領に対応した英語教育—小中のかけはしとなる理論と実践 (愛知教育大学外国語教育講座著、愛知教育大学)』 pp. 23-32.
- 久保田美子 (2006). 『国際交流基金日本語教授法シリーズ第1巻「日本語教師の役割／コースデザイン」』. ひつじ書房.
- 山本敦子・河合智 (2011). 「小中を通したコミュニケーション能力の育成をめざして—小学校外国語活動カリキュラム作成と小中連携」. 小牧市英語教育研究会発表資料.
- Horwitz E. K. (1985). Using student beliefs about language learning and teaching in the foreign language methods course. *Foreign Language Annals*, 18, (4), 333-340.
- Horwitz, E. K. (1987). Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden, & J. Rubin, *Learner Strategies in Language Learning* (pp. 119-129). Prentice-Hall International.
- Lightboun, P. N., & Spada, N. (1993). *How Languages Are Learned, second edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Richards, J. C., & Lockhart, C. (1996). Exploring teachers' beliefs. In J. C. Richards, & C. Lockhart, *Reflective Teaching in Second Language Classrooms* (pp. 29-51). Cambridge: Cambridge University Press.
- Riley, P. (1997). "BATs" and "BALLSs": Beliefs about talk and beliefs about language learning. In L. Dickinson (ed.), *Autonomy 2000: The Development of Learning Independence in Language Learning* (pp. 90-114).